

かにた婦人の村を訪問して

2012年7月1日 西川優子

京葉中部教会創立 50 周年の記念に、これまでずっと献金を捧げてきた外部の団体をお訪ねするという取り組みの第一回目として、6月27日に教会員4名で、館山市の社会福祉法人ベテスダ奉仕女母の家「かにた婦人の村」を訪問しました。

内房の海に迫る山の中、急な上り坂の上に、深い緑に囲まれた、大きな茨の冠をかかげた建物があり、中からシスターのような服装の女性が出てこられて、「お待ちしております。」と暖かくお迎えくださいました。きれいな山の空気と海の香り、静かな午後、私たちは、日本で一番初めにディアコニッセとなられたこの天羽道子さんのお話をうかがい、あっという間に3時間もが過ぎて行きました。

ディアコニッセとは、ドイツ語で、奉仕する女性という意味だそうです。カトリックのシスターと同じで、自分の財産を持たず、一生独身で社会的奉仕に献身する女性です。日本には「ベテスダ奉仕女母の家」という社会福祉法人があり、そこで学んだ女性たちが献身してディアコニッセとなります。もともとはドイツで始まった活動で、本教会の初代牧師の石丸実先生は、実際にドイツのディアコニッセの活動を現地に行ってお覧になっていたの、よく礼拝でもお話ししておられました。

かにた婦人の村は今年創立47周年で、今は亡き深津文雄牧師と、天羽道子さんによって、売春防止法の成立を受けて、被害者であるにもかかわらず差別を受け苦しんでいる、自立不可能となってしまった女性たちのためのコロニーの必要を厚生大臣に訴えて建てられたということです。

国と県の認可による「女性保護長期入所施設」ですが、その内容は入所している方たちが一方的にお世話をされるというのではなく、一人一人の力を出し合って農業やパン作り、陶器作り、機織り、洗濯、料理、全国から送られてくる不用品の整理やバザーの準備、お誕生会や礼拝などいろいろなことを通して共に生きるという生活を送っておられます。敷地内には食堂や礼拝堂、お風呂や作業場など22棟の建物があり、長い間にみんなの力で一つ一つ増やしてこられたそうです。定員は100名ですが、現在は73名の方が全国各地から入所されています。その半数は初めからの入所者で、高齢化が進み、この4月から介護保険サービスも利用できるようになったそうです。その反面制度が変わり、最後までここで暮らすことができなくなった方もおられる、ということも聞きました。

旧海軍双子山砲台跡を払い下げられて造った広大な敷地内には、入所している方々と職員のみなさん総出で手作りされたという礼拝堂とその地下の納骨堂があります。ブロックをひとつひとつ積み重ねて造った小さい建物ながら、ステンドグラスと美しい手織のタペストリーが飾られていて、温かみを感じます。正面には交流していたウガンダからのエアメールがたくさんきれいに並べて大切に貼られていました。アーチ型の梁が高く張り巡らされた、山小屋風の礼拝堂です。納骨堂は明るく風通しも良く、上で毎週守られる礼拝が聞こえてくるという造りになっています。教会では毎年12月25日に、入所者のみなさんによるページェント（降誕劇）が行なわれるそうです。礼拝堂の眼下には館山湾と海上自衛隊のヘリポートが広がり、のどかな山の上と対照的な景色でした。

もっと山の上に上ると、「噫、従軍慰安婦」と刻まれた石碑がありました。ここに身を寄せておられた当事者の方の話聞いてショックを受け、1年間悩んだ末に深津牧師が建立されたそうです。初めはヒノキの碑だったのが、支援者のみなさんの寄付と作業により石造りのものにすることができた、ということでした。毎年8月15日に慰霊の行事を行なっているそうです。

山を下りて元の建物に戻る途中、入所者の方とお話する機会を得ました。その方は、びわの葉を一枚一枚丁寧に水洗いする作業をしておられました。乾燥させておいしい「びわ茶」にするということです。大きなやかんにいっぱい淹れたびわ茶をごちそうになりました。クセがなく、透き通った美しい赤紫色で、すっきりした味がおいしくて、ゴクゴク飲み干しました。

どこにも行くところがなくなった女性にとって、このような場所があり、自分に合った作業をしたり、友達ができたり、何よりも安心して生きていくことができる、そんな「かにた婦人の村」を作りたいという創立当初からの願いが、今も生きることがうかがえ、是非またうかがって、もっと学びたいと強く思いながら帰途につきました。